日本カウンセリング学会第55回大会

演題番号　P-48

大学生の学習行動に関連する要因の検討
－自己抑制コントロールと登校回避感情に着目して－

キーワード：学習行動, 自己抑制コントロール, 登校回避感情

菊地　創[1]　富田拓郎[2]

1）松蔭大学コミュニケーション文化学部　2）中央大学文学部

本研究の背景

- 大学入学者の多様化が進むとともに，大学生の基礎学力低下が指摘されるようになっている。
- 学力低下の背景として，自主学習時間が少なく，学習内容の習得が不十分であることが指摘されている。

↓

主体的な学習行動を促進する要因を明らかにすることは

大学・高等教育における重要な研究テーマである。

学習行動に関連する要因①

- **学習活動を妨げる欲求を適切に制御する能力（セルフ・コントロール）が重要（Zimmerman, 1998）。**
  - 例えば，ゲームやSNSなどの学習を阻害しうる要因を意識的に制御する能力が重要性が指摘されている（中西他，2015）。
- **特に、本研究では自己抑制コントロールに焦点をあてる。**
  - セルフ・コントロールは自己抑制コントロールと自己解放コントロールに分類される（高橋・三浦, 2016）。
  - 自己抑制コントロール：必要な時は意図的に自分のやりたいことを我慢する，あるいは出来ればやりたくないことを敢えて実行する行動。

学習行動に関連する要因②

- **登校回避感情：生徒が実際にどれほど欠席しているかどうかにかかわりなく，学校に行きたくないと思う気持ち（森田, 1991）。**
  - 大学生を対象とした研究も行われている（e.g. 堀井，2013）。
- **大学生の登校回避感情は無気力傾向と関連することなどが明らかにされている（堀井，2013）。**
  - 大学生の無気力≒スチューデント・アパシーは勉学に対して選択的に無気力を示す状態（狩野・津川，2011）とされる。

↓

登校回避感情が学習行動を阻害している可能性

本研究の目的

本研究では，大学生の学習行動とセルフ・コントロールの1つである自己抑制コントロールおよび登校回避感情との関連について検討する。

そして，その結果に基づきながら支援方法について論じることを目的とする。

調査手続き

- **調査時期と調査参加者**
  - 調査は2017年6月～10月に実施した。関東圏の学部学生353名が調査に参加し，回答に不備のなかった343名（男性116名，女性227名）を分析の対象とした（有効回答率97.17%）。平均年齢は20.13歳（$SD = 1.36$）であった。
- **倫理的配慮**
  - 調査への協力は任意であり，本研究への参加に同意したとしてもいつでも撤回できること，得られたデータは個人が特定されない形で統計的に処理され，プライバシーは保護されることを説明し，同意の得られた学生にのみ協力を依頼した。

使用尺度

1. **学習行動尺度（光浪，2010）**
   - 1因子で構成される（勉強の時は，授業で配られたプリントや資料などをよく読んで理解しようとする）。
2. **自己抑制コントロール尺度（高橋・三浦，2016）**
   - 「向社会・向目標的抑制」（サークル・ゼミなどの集団活動のために，気の進まない仕事を頑張ることができる）と「欲求・衝動の抑制」（ダイエットをすると決めたのに，つい甘いものや夜食を食べてしまう）の2因子で構成される。
3. **大学生用登校回避感情尺度（鈴木他，2011）**
   - 「友人の拒否」（友達と一緒にいると楽しい），「教師への反発」（学校の先生に対して親しみを感じる），「学校への反発」（授業を受けているのは苦痛である）の3因子で構成される。

※（）内は項目例を示す

相関係数と基礎統計量

Table1　相関係数と基礎統計量（Mean, Standard Deviation, α係数）

	1	2	3	4	5	M	SD	α係数
1 学習行動	- -					46.42	6.70	.85
自己抑制コントロール								
2 向社会・向目標的抑制	.49 **	- -				29.07	4.66	.73
3 欲求・衝動の抑制	.46 **	.26 **	- -			21.38	4.88	.74
登校回避感情								
4 友人の拒否	-.10 +	-.24 **	-.05	- -		16.38	4.90	.77
5 教師への反発	-.35 **	-.27 **	-.12 *	.16 **	- -	13.65	3.57	.79
6 学校への反発	-.34 **	-.21 **	-.29 **	.25 **	.23 **	18.07	4.82	.76

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

重回帰分析の結果

Table2 学習行動を基準変数とした重回帰分析の結果

	β	95%下限	95％上限
向社会・向目標的抑制	.33 **	.25	.42
欲求・衝動の抑制	.31 **	.22	.40
教師への反発	-.19 **	-.28	-.10
学校への反発	-.14 **	-.22	-.05
R^2	.42 **		

** $p < .01$

自己抑制コントロールを向上させることができれば，学習行動を促進することができる可能性がある

- **セルフ・コントロールを高める試み**
  - 特定の反応を意識的に抑制し，それを新たな行動に置き換えるという作業を継続的に行うことが有効（Friese et al., 2017）。

↓

  - 大学生活においては，小さな自制経験をコンスタントに積む方法として，学期末の単位取得状況だけでなく，より短い期間での出席状況や課題の提出状況を学生自身がアクセスすることが出来るシステムの導入（野口・園田，2018）などが考えられる。

教師および，学校への反発が，学習行動に負の効果を示した背景と対策

- **教員および大学が求める学生像と「大学生の生徒化」のギャップ**
  - 教員および大学側は学生に自主性を求める傾向が概してあるが，生徒化した学生は教員のわかりやすく丁寧な指導を求めており，そうしたギャップが教員や大学への反発を生み，結果として学習行動の低減につながっている可能性がある。

- **形式面だけでないアクティブ・ラーニングと高大連携の実現**
  - 形式的にディスカッションやグループワークの時間を取るような放任的な講義形式では，むしろ学生の学習行動が損なわれる可能性を示唆している。教員には形式面だけではないアクティブ・ラーニングの実現が求められている。
  - 生徒化する学生は，高校時代の主体的な学習行動や，入学時点での大学および将来に対する期待や展望が乏しい（ベネッセ教育総合研究所，2018）。そのため，大学入学以前からの長期的な働きかけやキャリア教育が重要となる。

本研究の限界と今後の課題

1. **因果関係が明確ではなく，結果の一般化が難しい**
   - 縦断データを用いたモデルの再検討を行っていくとともに，学年間の比較など経年的な変化についても検討していく。
2. **複数の研究手法による知見の蓄積（介入研究や事例研究など）**
   - 複数の研究手法を組み合わせて知見を積み重ね，諸変数がどのように変化し，学習行動に影響を及ぼしていくのか，より具体的な検討を行っていく。
3. **研究対象の拡大（関東以外の大学生、発達障害学生など）**
   - 発達障害学生は登校回避感情を持ちやすい（髙田，2015）。より支援のニーズの高さが予測される発達障害生に対しても本結果が再現できるのか検討していく。

引用文献

ベネッセ教育総合研究所（2018）．第3回大学生の学習・生活実態調査報告書　ベネッセ教育総合研究所

Friese, M., Frankenbach, J., Job, V., & Loschelder, D. D. (2017). Dose self-control training improve self-control? A meta-analysis. Perspective on Psychological Science, 12, 1077-1099.

堀井俊章（2013）．大学生不登校傾向尺度の開発　学生相談研究，33，246-258.

狩野武道・津川律子（2011）．大学生における無気力の分類とその特徴－スチューデント・アパシーと抑うつの観点から－　教育心理学研究，59，168-178.

光浪睦美（2010）．達成動機と目標志向性が学習行動に及ぼす影響－認知的方略の違いに着目して－　教育心理学研究，58，348-360.

森田洋司（1991）．「不登校現象」の社会学　学文社

中西満悠ほか（2015）．大学生を対象とした日本語版学業的満足遅延尺度の開発　パーソナリティ研究，23，197-200.

野口大貴・園田直子（2018）．セルフコントロールの水準と変動の大きさが大学生活への適応感に及ぼす影響　久留米大学心理学研究，17，25-37.

鈴木真波ほか（2011）．大学生の友人関係に関する社会的スキルと登校回避感情の関係に関する研究　学校教育学研究，23，27-33.

高田　純ほか（2015）．大学生の発達障害の特性と不登校傾向の関連　総合保健科学，31，27-33.

高橋百合子・三浦正江（2016）．自己の抑制と解放の観点による新しい大学生版セルフ・コントロール尺度の作成　ストレス科学研究，*31*，55-61.

Zimmerman, B. J. (1998). Academic studying and the development of personal skill: A self-regulatory perspective. Educational Psychologist, *33*, 73–86.

ご視聴ありがとうございました

- **筆頭著者連絡先**
  - Email：s.kikuchi@shoin-u.ac.jp
- **謝辞**
  - 本研究のデータ収集にあたり佐々木亮さんに多大なご協力を賜った。記して感謝申し上げる。
- **利益相反開示**
  - 本研究に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはない。